

英  
行  
日  
誌

二

柳田文庫  
文庫11  
A 370  
2



A370

2

英行日誌二

柳田泉文庫

48-8736

西曆一千八百七十一年

英行日誌二

六后山房藏



*colirocu Booklet end*

後貴録二  
六石山舎

*June*

西歴

一八五七年

六月

1 晴多

*Painting*

*Camp*

2 晴午前室ヲ樓上轉ス。雨ハ...

拂ッテ去ス。ハオシト。ハシリングハ...

3 十字就眠

晴朝延々。村田々々。...

老歩十字就眠

4 陰雲中寒晴兵期之日曜日  
子士字就睡

5 晴午前土田より訪り午迄土田に  
伴に結髪店に至り髪切し士字就睡  
土田より地圖一巻を受けし

6 晴午より別帳  
7 晴凡烈寒甚の師匠九字来り  
土田、村田及岩崎の伴に市街に散

8 歩途中分袂夫が入浴し士字就睡  
晴冬より十字就成

9 晴冬より一園の料を拂ひニホシ  
ド一シリングルヤンスに襟飾、ズボン  
釣つたおん

10 晴冬より午迄雨の替り晴

11 晴日曜日洗濯物出来ぬ  
土田より訪りし思の老々若々

○此のいふは也字を来してあるこ  
二字就睡

12

晴 甘田と云ふ會汁おほほ七ホンド一  
こりリンがあは後ス収袋ヲおほ黄各  
甘田土田や来し市街ノ者あつた字  
就眠の余之為西行也夢魂必郷  
関不安眠者常居多是人子之  
常情所不得已也老親在郷

其情亦應然矣为之潜然濕  
袖者多

13

晴 午浴雨○日本出づ玉我ヲ忍ぶ○  
○ンンン時侯此迄調度日本三月  
比しぬし時ずるゝ甚だ寒気烈く  
大鐘就るもなまこ土人しよと  
例筆分もきしどののり強と気候  
息をたるとしと考成る○古人曰胡

歌蕃笛感情尤多此言真然  
我甫知古人之弗欺人也

14  
向市街ヲ散歩ス土田公来  
カ及ビ髮板ヲ取ルニシテ

十字就睡

15  
晴雨無定陰霧別塞森然来  
訪至土田公不遇南面翠幕三條  
侯之隨從之由十字就睡

16

佳晴頗佳日本宵月以し如三年前  
土田公至一周日會汁ヲ宿スボ  
ンドナニシテ四ベニスこの土田公俤  
七仕立屋至リ衣服ヲアツラヘ明日  
只とし以來ハヤキ由ラ職人言の玉  
田公来ハ是分七八日以前日本人鈴  
木某山林某及高松藩士三人  
ドンハ来由同人し話シヒリ途中

陰度人ニシ見ノ頗ル奇偉ニ九字  
半就睡

17

雨天午返仕立屋坐ル未夕出来  
セダラる趣ニ空歸村田カヲ訪  
当特陰度ニ玉其國多ク付咲  
し由ニテカシキサドシホテ  
る同人し話し九字半睡

18

晴凡日耀日黄名土田カ伴ト生

抑比し花園ニ  
毎口舌ヲ  
るニサ  
休リ伴  
不表

免車ニ  
ツリマア  
ガ  
ニ  
至  
実

此句凡月送来非有意  
由人感慨為愁来 起承未成

夢半関山賤乍醒半志薄雨

程茶青起承未成 蕃

近天明 目ヲ  
ニ  
十  
字  
隔

宅ス比る急戲場及カレワサ出

板以山ちれれともしる日暇

此は休みの

19.

晴 曇るが雇う所の師匠四子  
十六メ子ツク来りて午後雨怒り  
里袋ニラシおれ集廣崎し人鬼つ  
少の日竝人しゆ十字花城  
師匠云ふ近りな那七也震す  
二千人数屋死し人ある由に傳  
一う忽との仕立をさすまふ事

土田や花城おと金舟

20

於晴午は雨の以一付板ち手洋中  
萬里大洋波倒屋十少蒸  
氣破凡烟發觀避道較竜  
亡廿日行程甫見山の比る雷  
鳴殊強し土人云フンジンもあし  
若雷しりるを由の十六子花城  
仕立刃が衣服去来存ちる由  
晴朝来仕立刃もあし衣代と掛

21



三ホシのいしりりリングのペン  
 の師匠いふ。来このとら日本五月  
 竹節句しゆ依し思し掘切し燕子花  
 亀井た、天神の藤花物も空こ  
 乃つるし思ふ、杜鵑并蛙鳴を  
 かく海を毛虫の市所りおす  
 逢思ふ土を礼儀、  
 午前時子好ありつに歴史一冊

是日の辰飛しりてあつこまの辰

おと子好訪出のや士を礼儀  
 晴二ばうらんどいひりて  
 古人曰杜宇鴻鴈旅客之至尤悲若  
 郷愁为易動今余寓命頓決地絶  
 鴉鴈之二者而胡歎者尚其感也  
 也尤深矣と此鳥鴉及雀おの辰  
 ちつとよれいり穴き筆をす  
 ふしはよれいり穴き筆をす

○此自分師匠の一為廢う

24 始りいかに一丹に末に師匠に付て

學ぶに十字に就けり。師匠に二はに

25 性凡吹く唯の之を字の十字

此也

26 古多きう揚子に七に甲に

六にふすこ上の子に也

27 晴多きうの土田に事せん

○初聞たり見る人し佐に口を

半國と不知し子起る米五方不

軍艦うはる賜り酒しうの〇其

其酒未メズ也

29 晴多きうの多田に事せん。是佳云云

想懐當時我國梅雨天深林濃緑

桂鶴吟雨洵一歲之佳辰此時为然

而今也余遠在異郷長背此佳辰先

可嘆也豈無鄉感耶

晴一雨の夕景に於ては  
たゞ一こぼりこぼりたる  
村田又一作の雜歌使つた  
日出立し由りたるの如し  
十九の定る出立あるや  
杜宇不来芳夏老客心友由不  
来愁の二句録以為他日之笑柄

想

July 思憶

七月 朔

黄梅時節松魚美懐當友朋  
能河接取の二句十五字に成

佳精體淡午前浮村田の至  
李唐道釋書一舟の買り  
○此一日師匠の休サ右後  
十二子に成○此は西極明月

日本海日八月廿五日  
同日廿五日

○ 雨天七字八時○日曜日○村田

○ 午前十時○書○夜○

○ 書雲一角放晴處窓外無湯

○ 雨雲一角放晴處

○ 硝牆斜暈射眼來晚晴得二

○ 黃名ハイトパークに至る途

○ 過雨七字張宅ス土田久及村田又

○ 月引二十二字成

○ 午雨乍晴午前十時○伴以

○ 入浴ス一字收歸宅ス七字

○ 就眠○音ハ又會話多流ハ

○ 夕 晴多ク若安者廿四日○伴以

○ 初尚失物○ 早

○ 土ノ子元成

5 晴 無きもの十字記号

6 晴 一字ヨリ蒸気車ヲ備ヒクリ

ストルバリスニ至ル夜十二字路

歸宅ス因リ若土田村回及若

崎頗畫碑見シ地シ佳景実

目ウ有ラスニシ余歎歎也

此頃不記其津至後再三

遊キ米石海可記其概也

。鉄砲ヲ試シ去若津口ヨリ

ヲ試シ若土田村回及若津口

。車ヲ試シ去若津口ヨリ

余至英國既一月餘而未

有壯哉余出遊ヤ実ニ一

往遊美也也しいナビ実ニ

月夜ススヤヤ如人た

多美田ヨリ振翅アリス

上田文  
新井橋  
宿く  
宿す  
宿ま  
宿ま

以てやしの歎を及る

○此日師匠より清くは休らる

○~~精~~精老る一周日會計あり

8 晴多る森が来り

9 晴日曜日とせし、村田も終る

未だ夜多るの也つりよし

余常懷老親家郷之不能忘

外懐

余常懷老親之在家郷者不能

暫忘之夢魂必越関山因於二

句録以め他口之羨柄

夢裏相逢無一語醒来唯覺

淚痕涼○又記余之家郷頗暖

候追想當時尖鋒知應稍盛

花莊納涼淺山晚步冥夏時

之扶杖也而無其事河味息

○長切人乙富某昨日日本  
 信帆同人誠得意之由土田  
 女送別の趣に○得二句偶  
 金に作其又見跡の影に  
 成硝窓時尖雨色来  
 ○特来雲際時来雨下露  
 下陰又下晴追想日本梅天  
 為此二句十字就睡

✕

10 晴多るの例也  
 11 晴陰 多るの例也  
 12 陰中雨の意あり成り流る  
 ミシシリシグ九やこスこの  
 例也○はり胡晴著る皆也  
 13 晴多るの  
 14 晴一周かし會計拂うニホント  
 ニシリシグの世ノ日師匠

廿二字半分持墮會に至る  
ハ字ハ揚(成)に至馬車にて主  
字ニ陽心(心)同リハ土田村  
名(成)の博覽會ハ抑女帝  
之太子ニ考之十年一度此  
ニ半之品初ハ茶ニ正月  
持墮會之陶器及綿巾中  
其(成)其(成)尤クふるまふ

茶氣揚之端如シ製造  
ハ其(成)其(成)其(成)其(成)其(成)  
其(成)下(成)其(成)其(成)其(成)  
但森絶之(成)而(成)戲場三幕  
其(成)其(成)其(成)其(成)其(成)  
其(成)其(成)其(成)其(成)其(成)  
其(成)其(成)其(成)其(成)其(成)  
其(成)其(成)其(成)其(成)其(成)  
其(成)其(成)其(成)其(成)其(成)



○三ノ末  
1ノヲウ  
深ム地  
口分原  
近三時  
来ん

★15 晴毛る

16 晴日曜日キウガウニンニ至

土田及じ村田人因る

17 晴毛るの ○此ノス後○

18 晴毛るの ○此ノ方リリノ後

19 此ノ入流ク

晴。俞領近頃頗甚暑計常至七

十六七八度此諸我國當四月下旬○

平康

貴人ニ命候し暑中或ハノ友位ニ至

るまるとして英人當暑ニ遊是

し衣服亦き只命候しぬ是に比

年分然に子と從者に未又至し

子に肉取衣服亦尤も遊是し

子者亦まきりし○

胡笛蕃歌愁易法確実夢

芝舞雅成例記成

2120

晴老事

晴一周口の分汁のる一ポンド  
 十六のシリングニペンスの想像  
 分極尖鋒當極盛本我  
 國而三州之内涼而墨水  
 月亦當亦貴而此地絕莫  
 此佳趣可嘆也此文章擬南洋  
 美地以類例置例也

29

晴長州人以北甘果未訪の此

苗大ツ坊の *Sumak* の之馳走其に

右 *Sumak* 製るに砂糖をこも

をラスリ共しシ毒入しこもこの汁

こぶく之ぬ湯をさしぬる

苺腐ラ混こむあひ十二う

此 *Sumak* 製るに砂糖をこも

23

晴日耀日之例候別

想憶正興十一  
億想心尖鋒當極盛近頃於  
我日本而亦於二州而月步  
於墨冰當亦而此地莫有  
一此佳景絕而可嘆也其文章  
振洋文而裁之是以文字錯倒後  
置極困難而難讀能茲翻譯者  
必能讀之

24  
誰道家書當萬金披封字  
皆愁心○余事○必  
余事之採必待解○親之膝下  
而一室而居而○淚痕亦  
區扶席者多他日業成而歸  
鄉里侍雙親之膝下則其喜  
實不可言暫俟焉○年○例成  
晴○水○深○移○○○王○

春風春雨也開花  
春風春雨也落花  
昨日知者今日  
人宿萬事如夢

ふいおんしりんぐれん。

25 晴。夜訪土田。夜飲盤智酒。

26 晴。老事。

27 晴。多事。

28 晴。追想去歲。余去歲四月嬰  
病。六七月之間。疾尤篤。今月適  
當六月。在去歲。則憂病在今  
歲。則遠在異域。人世之飄蓬。關

August

~~28~~

鎖実不可逆期为之起一慨感の  
一周に會計をふるおと十七日  
去。ペンス。此村の定定ス

29

晴朝十字の祭途伴出田名  
浜村田三子 二至。晝睡

驢馬ヲ渡ル帰途雨者つぬ  
帰宅ス少雨夜宿之細老此  
煙ヲ伴ヒ至ル夜食ヲ嗜ス此地

日節近ラ休ム

30

晴。日曜日。南訪村田大居

2. Mark's Pleasant Road 也

此日得故國郷里風光知當  
僅二州烟雨柳橋月之二句

31

晴老事

八月

外

朔ノ晴去りの同玉田及村田大居月於野

2 晴多きなり。同村奥、庚辰於路外

3 晴多きなり。和木ニト

4. 晴一周日之會計、つめ、十九日、此  
四ハシテ半ニ。此家之娘、昨ハ不  
快ニ在病床ト朝ハ老ク快然ニ  
余ノ部屋ニ至リ。此日、前年、津村  
田入至、郊外、遊ス。日本之風、午  
後、雨ニシヤ。訪土、思ハ不見。

6 偏頗之地、數十里間、莫有一點之山、頗  
類我、且江戶而我郷、駿州、靜岡、高嶺  
四合、肆曰、則皆秀峰、煥然尤異於此  
境、而在靜岡、則常飽于看山、而在此境  
則度看山我郷、尤有意之情矣。  
5 晴。黃夕、土田女、伴ヒ、所、運、動、ス  
十二字、以、畫、碑、保、心。  
6 晴。日、耀、口、の、内、上、同、地、也。

此日迄  
此日迄  
此日迄

疾シ細君と疾スハ糸也トシ  
此日迄  
7 晴の土田女出立其夜也  
走リ余ハ早リ歸ルノ舎スハ  
此日迄  
人々人々

8 晴の朝九字半土田女出立  
此日迄  
佛地ハリスニ在ル地也

9 晴の余到南嶺既三月餘而未嘗  
通英國哉可嘆也

10 晴の結髪女  
晴の用之舎什ラカスニホニ

11 晴の同ク下ニ食子ス

12 晴の冬

屬我日曜日の多る

時の多る

時の多る 素

時の多る 又談本

時の多る 依

時の多る 依

時の多る 依

時の多る 依

○余在命頓也心期五歲在洋中美  
當勉強勤學子依是思之歸國後  
當於花醉月盡其快樂也唯單  
願雙親之健在無恙而已○余  
每懷雙親之事魂飛魄動有  
欲直乘風雲歸我鄉笑之意而  
不能安恬因存寸刻實唯起嘆  
息之意而已○也白旅者



78/9

細君海に上るに余は月を  
り詠つ太刀、大司三郎  
定に越この尤も比し宗し小  
日川の午に本林寺に訪  
不思シト産痛に候に因却  
情のまゝなり一園口之會并り  
めス一歩とド十六にリング六ハス

晴のまゝなり

79

この春の暮る森寺に訪つ海  
行く越この男シト  
晴のまゝなり  
昨夜眠り度宗  
婢窓の戸を開く響きしらす知熟眠  
セシニヤ少之風邪ヲ得タの村田女  
家内公の公に津由女清朝  
系りの越この南橋に先は小  
女初まり訪相の深に候

~~天~~

20

日曜りの風ぬの<sup>の</sup>生し夜は空を  
え身とあつる<sup>る</sup>あふる<sup>る</sup>の<sup>の</sup>かう<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>り。  
及<sup>と</sup>が<sup>ら</sup>う<sup>し</sup>テ<sup>い</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>の</sup>歩<sup>の</sup>奇  
り<sup>の</sup>す<sup>の</sup>十<sup>の</sup>夜<sup>の</sup>林<sup>の</sup>風<sup>の</sup>吹<sup>不</sup>得<sup>の</sup>二<sup>の</sup>句  
秋<sup>の</sup>雨<sup>の</sup>夜<sup>不</sup>吹<sup>の</sup>歌<sup>の</sup>夢<sup>の</sup>落<sup>の</sup>家<sup>の</sup>山  
龍<sup>の</sup>山<sup>の</sup>島<sup>の</sup>比<sup>の</sup>白<sup>の</sup>海<sup>の</sup>也<sup>の</sup>か<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>し<sup>の</sup>金<sup>の</sup>ラ  
イ<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>深<sup>の</sup>く<sup>の</sup>も<sup>の</sup>素<sup>の</sup>三<sup>の</sup>四<sup>の</sup>の<sup>の</sup>洞<sup>の</sup>に  
歸<sup>の</sup>る<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>。

七

21

陰晴<sup>の</sup>年<sup>の</sup>空<sup>の</sup>の<sup>の</sup>家<sup>の</sup>之<sup>の</sup>細<sup>の</sup>馬<sup>の</sup>海<sup>の</sup>辺<sup>の</sup>公<sup>の</sup>儀<sup>の</sup>  
宅<sup>の</sup>ス<sup>の</sup>小<sup>の</sup>女<sup>の</sup>月<sup>の</sup>道<sup>の</sup>二<sup>の</sup>山<sup>の</sup>と<sup>の</sup>細<sup>の</sup>君<sup>の</sup>を<sup>の</sup>使<sup>の</sup>  
この<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>る<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>日<sup>の</sup>限<sup>の</sup>も<sup>の</sup>子<sup>の</sup>く<sup>の</sup>時<sup>の</sup>。  
宅<sup>の</sup>ス<sup>の</sup>解<sup>の</sup>中<sup>の</sup>子<sup>の</sup>兒<sup>の</sup>真<sup>の</sup>て<sup>の</sup>代<sup>の</sup>杯<sup>の</sup>  
却<sup>の</sup>平<sup>の</sup>生<sup>の</sup>生<sup>の</sup>為<sup>の</sup>後<sup>の</sup>其<sup>の</sup>の<sup>の</sup>越<sup>の</sup>江<sup>の</sup>  
取<sup>の</sup>水上<sup>の</sup>接<sup>の</sup>涼<sup>の</sup>風<sup>の</sup>晴<sup>の</sup>月<sup>の</sup>血<sup>の</sup>五<sup>の</sup>  
末<sup>の</sup>の<sup>の</sup>甘<sup>の</sup>田<sup>の</sup>云<sup>の</sup>言<sup>の</sup>曰<sup>の</sup>本<sup>の</sup>七<sup>の</sup>月<sup>の</sup>七<sup>の</sup>夕<sup>の</sup>  
本<sup>の</sup>申<sup>の</sup>都<sup>の</sup>不<sup>の</sup>定<sup>の</sup>常<sup>の</sup>炊<sup>の</sup>糲<sup>の</sup>。

水口常柳  
歌名千  
同欠

ハ初リ

22

精のモリウニニホドニニウニグ

ねズ

23

陰のモリウニニホドニニウニグ

24

陰のモリウニニホドニニウニグ

同入流ニ海辺に原氣ニニ

面ふこころのモリウニニホドニニウニグ

ヤウニニ

ヤウニニ

十九

土

25

精のモリウニニホドニニウニグ

Hand

干のモリウニニホドニニウニグ

道ニニ

鮮のモリウニニホドニニウニグ

晴のモリウニニホドニニウニグ

仲のモリウニニホドニニウニグ

Let's return back to

Sweet 16

三

18

26  
○小字  
○書  
○二  
○三  
○四  
○五  
○六  
○七  
○八  
○九  
○十

Japan I will return  
presumably to Japan. ○此文章  
○此社細君家内未定アリ餘  
○西工○○○寺林ノ坊ノ名鬼  
27 晴○日 晴○の午後晝睡  
余去日本初と晝睡不実ノ愉  
快ヲ覚ユ○○余気色殊佳也  
依し思し午睡養生ノ一端也

△西  
余懐我  
國當此  
其熱下  
○十  
○十

句子考つて讀むに於て云ふ  
大好文  
28 晴○の午後晝睡  
遙遙の午後晝睡○在来  
日○ヤ  
29 晴○の午後晝睡  
○余宗兄在津輕弘前當時  
駿州東陽自也

不の鴻信シ絶たしむに  
とよこ○うん大人石橋  
や実こ心死ス○古老母物  
の形かりあきや実こ  
全うの祈ス○也こ書  
種ここ報談の記スし他日  
是に実こ一子千斤こ  
るべし○の村田宅分

こて近かり奉し少こサバギ  
官人こ切腹サシ  
人まこ人程もみし由  
初いまだ程とあふ  
○墨梅がさる必ズ其和  
こ議海もあるやしと  
其和み子に在るよ  
考るぬこ不外令し

○如し宗しこストし車り蓮を  
て困ち強じまし其の子を  
○<sup>三ツ</sup>ヤンブルスリイジスグブツリハ七月  
△十六日癸業八月二十九日辛業  
○此日ハ因カ茅四片ヨリ南ハ  
○也ハモリトニ字未ト業也  
名嬌ノ字向飛ヒモリトシ  
其ノ交トマ子ノコ○向是改

痛をえ終る本在りの余し  
住長しやの迄也ハハリトあし日ハ  
ノツニヒルし下し郊路シ  
道遠しシ軍部スルのサも牛  
馬ヲ女トシ降ト雅ホリ也  
野ハ牛馬ヲ牧スル郊ハ牛  
馬殊々多し師も隨ち廣大  
この勝房の津真の落部ハ

是作任一討を口せし  
○歐州之盛都命換为茅一今  
也一鈕飄然来遊学干此地宜非  
人志に倚仗共唯氣在郷  
草想多美なる  
○此二の願生直波歐州地  
白河斯身の上来○我宗師  
尤也昔云雙親晩来之口難

義お進めやうかこ口是たし  
ふくし美の甲ふの徒口推察  
ちここのみん及や口の推察  
快名定て格別口推儀可  
ふあおと疎心のみ

○  
精の朝寺森は訪う余及中文字  
杯は面合ふ○此夜他君及

こストリスヤ父ト至る地ノ  
日当違ヤしこノツラヒルし下  
或ル南ウホ火くるてやラ  
特ノ名に地地ニ有テ大  
るもの見ル

31 晴本日の以市街行キし或ル人ハ犬  
ヲ強く打しニボリスメンおん右人物  
取り押姓名各ラ帳面ハ書付レが

何し取り何ころ子カ四付金も有る  
ある心し珠市井し器を比  
一てもてありあるか加し左大  
人し正おして角子引き来り  
此者之の日本ト大おまゝ  
美良ししの地白クリストル  
リス花火と細君ハリスに回  
て波ノ地と多クの



September 16

九月

朔の晴の一周し會什ラめス一ボシ  
ト十三じりリニハ四ベンスこの定儀  
日長が夕陽に著た女陣は  
○と既の時ととい陣はあつて  
昨の如く既の陣記あつて  
○とらふ少くは定儀よと固執  
抑は定儀を怪き合し甲子甲子

余と部屋に在る人物客位と客  
あるがゆゑ定儀の固執あるが  
係に定儀因縁と親しう成るこ  
あるやなくも勤むがも不可解  
し一子あり不徒此この  
夕陽が夕陽に著た女陣は  
若くは定儀一息の候この余し  
親友仲井は水路の部山

おしり車に考めたり。或るこ  
毛子と懐いとも偶々感  
りされば書かれた史の或る村  
田々いふと家旅合者其お島  
曰く云ふこ余いつるこ一  
信りた不識笑ふ保こ  
合ふこ仰懐り生かされ  
遊ぐるも不始と云ふ

晴の初雨四ツ塔が一こ晴

余妹名阿初年十九出嫁大前氏産子兄弟中  
其余尤親余常懐之置遠真動靜如何徒憶  
想之於萬里外而已偶記此の如表あり  
寺森がう行つ長州人か  
中やがた思つての  
Shunshin Kunitay 一冊り  
三ツリニズナマの日本

今日も大風  
少くも  
凡邦  
るる

大坂エー大風ニ大ニ人宅ヲ破リ  
人死スル多ク由ル由ル新岸  
伏ニ見ルモリソニ云この  
愚痴ニ我ハ七ハシ尚ホ大に  
あれは也してのて一回もあらし  
をばれは車ニ京并ニ駿州ニ矢  
張隨ふ大ニ批客スルは松  
下後宅おのり以て地ノ草上か

七  
Sunday

今日も大風  
少くも  
凡邦  
るる

口にスるにの動也か  
大風并に地を吹く  
○フトニニイストニ  
尤もいり十イストニ  
口に定ししにメシカ  
行くの  
晴の毎事の日曜日  
○午は又午睡ス  
余今少くも凡邦  
困却スル日本  
肩ハリテ  
思ハス

Monday

田の夢をこの細君曰く是に良  
 人三年以前死に去りし由に語るの  
 事晴の比也一人一切の考を花り  
 作らるるに月たこる方と推し  
 事あり。○午時分森寺に  
 訪ヒテイラニ至ルラムみん  
 両中殿執儀の歸路同人の  
 別しケエブニ乘ル其東の路

Wednesday Tuesday Thursday

此は三つに回リサーフニ試  
 事こやしとの  
 5時0時計し直し出来ぬ五に  
 六でこすれらすの待望の入  
 七時0時三々回リ師匠の休みの  
 晴の仕立屋に至り試み又寺森の道

廿五  
Tuesday

晴の一周日し會計ヲ為ス一ホニド  
十五シリングス及ビ四ヤンスの以ニ句  
我ニカカシキ事ニ來ル者ニ來ル  
有晴寒月後夜ハ深塔草如  
未再録  
晴忌雨歌夜ハ別業夕醒來  
歎腫難秋風下勅安慈外

廿六  
Sunday. Saturday

枯葉持以て此のころを  
以て少く雨終て晴し  
夕晴の森原の勝安の津田の河原の駿  
州雨親の足原の藤原の  
○此し夜下しジユシトスし陽定スの  
日夜細書カシツリキニ至ル  
日飛て陽定るゆゑ  
10 晴の日路々の○午前十時

Monday 廿九

来りのかしはアリ日本東西に鎮座  
住ラははるこの又朝鮮ト亞回止  
我事アツルぬ神朝難勝利  
しゆこの  
11 の晴の仕立屋分衣服ラトケル  
細君カレツレイケア帰ラモス  
12 晴の白晝に日本金きてツツはつ  
大花づの

Saturday 廿六

Friday 廿五  
16 晴のそるもクリスルはるパリチア  
15 晴の一周り人合多計あるト  
14 晴のそるもこの世に七時少く  
13 晴のそるものりお銀をツツ  
12 晴のそるものりお銀をツツ  
11 晴のそるものりお銀をツツ  
10 晴のそるものりお銀をツツ  
9 晴のそるものりお銀をツツ  
8 晴のそるものりお銀をツツ  
7 晴のそるものりお銀をツツ  
6 晴のそるものりお銀をツツ  
5 晴のそるものりお銀をツツ  
4 晴のそるものりお銀をツツ  
3 晴のそるものりお銀をツツ  
2 晴のそるものりお銀をツツ  
1 晴のそるものりお銀をツツ



夫全地球  
比之海  
曰考克  
曰原

て国を知るの比り  
少く陰りし陰はく  
こしに創して  
非人之天下萬物  
余嘗謂萬國異形殊語  
然道鬼神之地  
地球造創之時  
而論之鬼神  
之意何曾知名  
是為英名彼為佛  
此為魯

余有背強  
起入西里  
摩  
不

此為世但人得而名之耳然則其若虽各別  
其真唯圖一世界而其名則偽而已  
依是論之呼我曰日本則誤之也呼我  
曰臣子則人則又誤也呼我曰歐羅巴  
則又誤也而唯呼我曰世界之人則是也  
晴の多き  
晴の大に快念  
淡き

源書





命快  
命快  
命快  
命快  
命快

21

佳晴有春気の朝七字半過ぎ

師匠来し此の分村田し豚大生

師匠其の家ニ招き教ふ事

○此の始メテ火ツケム子ノ入ル

22

晴の多し師匠七時半過ぎ

23

陰の頗実の師匠七時半過ぎ

24

晴の口曜の細君云く命快六月

大板電降り五時過ぎ道降り

命快し字を家下は余滑国し国也

を家しやん起しものまの

し臨りりりかあアメリカし

まをゆるるるを回し国ケ

まの無矢耶分七甚し無矢耶

少しをいひこす聞く政の

大板大の電しるを其のたに

余兵命快を其しより

之を分しと祭の地を以て  
 億友を以て建ちたし其宅し  
 製作の衣服の製作五気車及馬  
 車に至る此の地を以て命を以て  
 推する併し此の地を以て命を以て  
 億友を以て識者し笑し招く  
 もあるやしと云ふは如く  
 余此の書に名を英行の徳と云ふは

比と多少し  
 凡て文書まじり  
 白七文字  
 是れ日本  
 城も易に不純し味あり余は其を  
 録し先く之を置こむる信ふ  
 貴録と云ふは其れは日必書と  
 貴録と云ふは其れは日必書と  
 ありては其れは日本と云ふは  
 比と多少し  
 凡て文書まじり  
 白七文字  
 是れ日本  
 城も易に不純し味あり余は其を  
 録し先く之を置こむる信ふ

Thursday  
Wednesday

昨夜此出所し主人多故隣、安ふ、  
其而命多、明~~日~~出立し内人  
○細君大志飲可也、之出立休入

25 晴之陰の東、主人出立すの  
活ス○実定(元強)くういふしじ

26 晴の毛も中

27 雨○毛も中

28 然日雨毛も中○  
素心なるも同

而記于此

我是今日为月夕推度 尊親及  
并兄當設筵開樽圍端相坐談  
話月下而其談必及我在異境當  
今幾為何事。可語

○而我亦在異境遠推度鄉園之  
喜如此他日相遇而相共話則喜悲  
當并到仍記于此○唯是幾月  
明否未可知也○仍二句





光緒二十九年  
正月

二十  
會

3	2	1	青	31	30	29	28
晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴
晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴

晴の一日  
晴の一日  
晴の一日  
晴の一日  
晴の一日  
晴の一日  
晴の一日  
晴の一日

晴の一日

晴の一日

晴の一日

他日  
正  
於

此身虽小此心大履編字區全  
地球の遠東萬氣高天於鐘  
萬里大洋壯志盤據者  
〇一鈺不佩洋夷地極川  
飄然履編五大洲の家  
仰親信想今夜月老猶定  
是活者未〇為案  
數寄我一封路是考

20 19 18 17 16 15 14 13 12  
 27 28 27 26 25 24 23 22 21  
 38 37 36 35 34 33 32 31 30

11	10	9	8	7	6	5	4
晴のち曇り	晴のち曇り	晴のち曇り	晴のち曇り	晴のち曇り	晴のち曇り	晴のち曇り	晴のち曇り

○荷に我をまといあぐさく  
 せし一回にぞし王氣うらや  
 晴しけし  
 ○早介にも成るるは親類  
 年々交りし親類は  
 ○家信甫幸 歡喜不可言  
 尊親及貴兄毎集時食於  
 余無幸於斯焉  
 言成



友人長田銜洋行中詩三齋未  
贈余和其一錄他處  
余思中陽右句

○絕莫看花慰吾顏瘴烟不  
原送中陽○登高有作○萬  
里胡天月一痕○他鄉明月他  
鄉雨別樣風光別樣情○  
○余思不齊為楚也○不考公

十月

12 晴○日翳日○朝來小霜記始○佛  
差辨差出手并魚在外山師  
差出手并魚在外山師

13 晴○朝來霜路上白外之水  
始凍○仕出屋至リハルエトを  
矣不明後日試来ル可シトス之手之佛

14 晴○無事○夜來山雨○此以西日  
佳朝流水意決英阿法錄

深遠

此以字を氣に陰に某月の日を去る云  
15 晴○十字路より雨の○手迄至仕  
去風受候○モリシ西のウレ空り  
拂つ○  
16 晴○合計雨に九也ス六也ス之  
ロントに氣あり必ズ佳候に風あり  
れ必ス陰に雨候用し  
17 晴○冬も

此家之主に年死去此に細君新  
寡婦に成る由候に女之毒千萬之  
○記免事。此之月五の市中に少鬼種  
之姿形に市街を歩行す我日本和  
午之五折之如し昔に宗与華海に  
大接礼之るありし名に平を此  
風信存るに云つて○此の句  
抛去山鳥月之瘴州河を為



25 晴の曇り 夕刻曇り少雲午後  
 26 晴の曇り 日暮る 午後  
 27 晴の曇り 在床  
 28 晴の曇り  
 29 晴の曇り  
 30 晴の曇り 合計 一ホニト十二  
 朔 晴の曇り  
 2 晴の曇り

3 晴の曇り 日暮る  
 4 晴の曇り  
 5 晴の曇り  
 6 晴の曇り  
 7 晴の曇り 合計 一ホニト十二  
 8 陰の曇り  
 9 陰の曇り 在床の産業  
 10 日の曇り 在床の産業

十月七  
考  
不  
能

11日 床の<sup>掃除</sup>。家帰らスカキを<sup>して</sup>

12日 建替存<sup>に</sup>に<sup>に</sup>鹿<sup>を</sup>業<sup>を</sup>、

13日 受業<sup>の</sup>終<sup>り</sup>不<sup>出</sup>、

14日 受業<sup>の</sup>終<sup>り</sup>不<sup>出</sup>の<sup>モリ</sup>ウ<sup>ン</sup>、  
ウ<sup>ン</sup>ド<sup>ウ</sup>リ<sup>ン</sup>グ<sup>ノ</sup>扱<sup>ス</sup>の

15日 受業始<sup>り</sup>試<sup>道</sup>途<sup>の</sup>モ<sup>リ</sup>ウ<sup>ン</sup>

云々<sup>毎</sup>頃<sup>々</sup>を<sup>来</sup>混<sup>じ</sup>り<sup>成</sup>す<sup>所</sup>例

案<sup>不</sup>達<sup>と</sup>余<sup>と</sup>出<sup>く</sup>の<sup>パ</sup>リ<sup>ン</sup>ス<sup>ウ</sup>エ<sup>ン</sup>六

初<sup>佳</sup>と<sup>云</sup>う<sup>詳</sup>列<sup>の</sup>分<sup>計</sup>

16日 十<sup>四</sup>リ<sup>シ</sup>グ<sup>ノ</sup>ウ<sup>ン</sup>ス<sup>の</sup>別<sup>に</sup>洗

洗<sup>件</sup>ニ<sup>シ</sup>リ<sup>シ</sup>グ<sup>ノ</sup>お<sup>ス</sup>の

17日 受業<sup>の</sup>終<sup>り</sup>不<sup>出</sup>、

18日 受業<sup>の</sup>終<sup>り</sup>不<sup>出</sup>、



22 陰の多き日

○付信の五布

23 陰の多き日 ○明日曜の及明迄の休

24 佳晴お光日 ○日曜の夜来明る

25 陰のクリスマスツリーの市中一般戸を

鎖し南買せがし 顔能く日曜の

似より平生群羊を禁めたる道

群羊と許す群羊海津路馬

○又こせと一と称する木とて上へ

村の其ノ下にて口吸ふ顔の音の伝

心若邪は徳降せせを教ふる意ふ

るや 日の不人止る 臥坐のそ

るよこは 心を構へ云く 伊出又

不逢

26 陰の多き日 人氏をいとおし

クリストルパリ大お疎に成る云う

の途の 顔の 腹を 決し 氷凍 函

余曰本世女もあ 命次殊を  
之を熱人に推し居るや大に前  
と死すあま遠く唯連の雲霧  
下りて深き谷より光を見せり  
世に因りて入実と思ふ候  
故云々 ○命次氣候極悪  
を来し病実殊に多し命次胸痛し  
遂に死する病殊に老を肺病云々

多し治し難し日本に餘りあるし且  
多人瘵病にて死する者多し来りて  
多し有りて云々人食石は好  
此病氣をもつて又多人を来  
究に世に妻と吸或はれり  
死する者多し世に実と思ふ候  
云々 ○命次凡倍甲子  
説て女子を之に誦し了り



女子決て從て甲子子も芝居に誘ふ  
 あしはこし毎飲しカストムことし  
 し、ナイー余はあまきりり  
 27 晴のモリワリコンス東村をス病  
 中夜まぬるこはこしおひり  
 土字の雨をを化してる  
 28 陰のモリワリ車んのモリソニ云リ  
 学校にウイック或ハ三ウイック休ム

クリスモスゴライの後の夜ムラタ  
 こ、阪大生あるこの  
 29 晴の無事  
 2 佳晴をる  
 31 佳晴をる  
 西洋  
 正月  
 1 佳晴の午前短髪洗沐のモリ

リニ今日ハホリニノ伝云でふ素  
之晴○毛る

了佳晴○朝来友人長田健太郎  
自代ラ愛取同入佛都巴里斯  
在留し由之尤お原江東ホハ日本  
歸ふし由之即日長田ハ飛城  
尾云ふふかを也

4 晴○毛る

高麗

5 晴○毛る

6 雨○毛る

7 佳晴○同曜日○毛る

8 晴○毛る

9 晴○毛る

10 晴○毛る

11 晴○毛る

○此家ハ娘十歳常と云シ

不在りの時、暗はるに、隣宅へ、とて、シグト、  
 此所へ、妻、君、し、カセ、こ、し、所、し、由、  
 也、  
 此所へ、五、人、し、娘、あり、  
 此、之、所、へ、れ、し、容、子、こ、の、併、  
 至、此、所、へ、し、お、し、め、  
 12時 多、  
 13 小雨、の、ハ、リ、フ、し、な、人、長、田、健、は、  
 手、代、を、出、す、の、白、君、サ、ノ、

7  
 14 陰晴、年、常、の、新、来、勤、の、  
 此、の、世、に、而、身、の、く、ち、る、日、本、十、五、  
 七、  
 15 晴、の、多、  
 16 晴、の、多、  
 18 晴、の、多、

28 27 26 25 24 23

28	27	26	25	24	23	
陰	陰	陰	陰	陰	陰	陰
了	了	了	了	了	了	了
了	了	了	了	了	了	了
了	了	了	了	了	了	了

22 21 20 19 18

22	21	20	19	18
晴	晴	晴	晴	晴
晴	晴	晴	晴	晴
晴	晴	晴	晴	晴
晴	晴	晴	晴	晴

常是應以花合矣  
 梅花應笑為應韻  
 遠矣是  
 我印已歸人  
 梅怨地  
 年推度吾即

30

○

29 晴の多し  
 2 晴の多し  
 31 晴の多し  
 1 晴 多し  
 2 晴 多し  
 3 晴 多し  
 来りて午後時居く用之



15 晴のころんん 泳書と始む  
 16 晴の巴里新集の文の日  
 本に新南都法二巻と略  
 至花あふさるる  
 17 晴のさるる  
 18 晴の同前  
 19 佳晴の仕立屋に到り  
 エート之拂也るス  
 のバスニ至リ是

20 佳晴の色子の影とちこ  
 21 佳晴のハリス長田に成と出  
 22 晴の  
 23 晴の  
 24 晴の  
 25 晴の日曜日

モリリン託くし  
 出集の三六  
 交易カ  
 とモリ

2726 多るの村の生結はるの

精の決百女帝首府之カシノト  
ニ寺院に至リプリンス、ウエイルス  
之快金と拝謝ス称しこセンク  
ギフこと云フ実ニ前代未見之  
盛事と云フ事一日五歳こリヤ  
ト云フ四萬人ノ学校ノ見念路  
暮年と表スル。ポリスマン七本

○兵士列と云言済河ノ風船

となつ古府に於て夜来花火を  
惟我人尤多し我スル者行伏美  
官称出おぬに由こせら市中  
一船方有あし強じ日賑まし  
かし英回ニ盛てるしりある

2928  
多るの



○ *Shawash*

晴のモリウシニクシク或は若き男  
子クイーンをビストにミ打テ  
○此人の  
ミドク  
に於ラズ捕へられ獄中  
其年十七年之内に其ノ何レ  
わけとるを善く犯人あら  
べし  
○27日カセイドルに  
入ルル人一萬三千人にて云々

英人の数  
三十三万  
多し

○英國之人お摺て三十百萬人  
と云々  
陰の多ク  
十萬人と云々

3 日曜

5 月

6

2/20/19/18/17/16/15/14

マ子イヲ一七  
二五  
〇

〇長田女口本  
し子知を  
〇

〇

13 12/11/10/9 8 7

カス  
〇

モリ  
〇

日  
〇

22

馬

モウリウニスルキス

24

25

不知血戈汗馬

26

竹車載車斐里美原

27

比立司官法大輔佐利之輩素

28

之事又歸之之りま

29

30

〇七月二十日モウリウニを樹ス

四〇〇七月

〇二十三日初テデヒス之教ヲ受リ

〇八月十九日金汁ニホント

〇九月十七日金汁ニホント

〇十月十六日三ホント

5



29	28	27	26	25	24	23	22
君子之姿	英雄骨邪	志則是肥	身是雖瘦				

30

考

邦〇シ一モンス又一回決る成とある

る

三日

四〇四 決る一返りては再七回決る

ある日勝る相国生と云ふは不二花園

六〇









芳山、三十一

芳山、十八、二届、十、二、三

戸田、十八、の、二、戸田、十、六、お、二、

田、四、十八、の、田、口、三、十、六、

二十五日、山、雨、の、スト、二、ト、二、田、美、人、三、十、

二、ト、清、取、取、特、バ、ニ、シ、ヨ、リ、西、國、之、

金、者、じ、山、之、期、友、て、山、本、と、二、

長、の、之、書、生、説、二、ウ、ヨ、ク、之、大、コ、

富田、鉄、之、助、方、お、内、の、夜、人、か、山、方、上、

右、局、の、後、山、本、は、三、月、三、十、日、之、船、

乗、の、之、由、不、明、之、金、メ、ス、

二、三、の、四、十、ト、二、ラ、ヤ、

三、吉、田、レ、グ、リ、ニ、ヨ、シ、ハ、先、口、差、出、

中、書、落、姓、右、書、後、三、月、三、十、日、右、

五、し、付、ヤ、ホ、ウ、ス、ト、と、以、て、及、

尖、は、は、

晴

二十一日 曜り 伴一本多の  
雨子到リケミドバーク  
二十日 曜り 再レゲイ  
とあふ

二十日 終り  
朔 無事

二日 微恙 廢業 師匠之到らぶ

三日 又八松生ス使不念  
四日 来レ決断 治之英阿  
五日 事柄 巧考之内  
六日 中岡 小林 教師 帰ル  
七日 止持 行レし内  
八日 村田 氏 介 荷物 受取  
九日 村田 野矢 主田 倉 到ル  
十日 日曜 日 佳晴

○余去歲十一月二日到此家而既過一年  
○二月江南梅並時異境為客指  
佳期春同却幾多情甚敢不開花  
俟我歸

十日 毛子一村的女の居る所を  
去る ストケンにヤニクに至る  
ベングルロブローシ之内  
去るの所迄を休む

五日のふりアマリカ之國の由りぬ  
十五日雨の師匠、五ヶ所ト拂ふ  
廿七日晴戸田女が十八ポイント迄  
廿八日晴仕立屋一ホント五ヶ所ト  
廿日 叙拂

十日  
朔日曜日雨歩所支莊

五日晴ベニクヨフバインランドに至リ  
拾ハポンド受取ル○此向大使初ニ英  
帝謁見ス於ウイニ十年後エーター島  
拾ニ字ルレイトウエスタスライシーと  
七ウ又ニツルニ字ルウケンガトニ至リ大  
知事ヨリおむ○此向初ニ霜落地  
凍ニ頗ニ寒ニ○司官佐木大輔  
此地又ニ東ニ西ニ付所ニカク既ニ

尾佛このニ田○此向土田カク既ニ  
ザンツラニ了事ニカキ事ニ  
七日晴ノ無事○ジビス日本茶  
少ニも焼ルニ本多及天野半西人  
不在中事ニ訪メ内ス男  
八日ノ晴事向ニ水人暖酒正蘭  
晴ノ日暖ニ○お田カク十中  
晴ルニの強金武拾三和ニト七

マヤニスにのち、辨使使館の法を  
みる。こののち、  
おうすに、マヤニスにちかひに以て  
する。其の事、このころに感  
に、信をえりて、さうして、  
利もしく、  
九日の晴、杉山、  
にもあつたし、領とれ、ハポント、  
す

シリシバに、別館を、  
スラ、  
十、  
五日のビクト、  
別、  
到、  
ン、  
也、

○  
三ビス  
今身付  
おろし  
五

送別ス。略々夜九時の如く故人を  
決す。忍之。志も。杉山女に泣し  
長田佳太郎。成也。甥に杉山  
リード。メジャー。之。歴史。三冊  
も送。こ。夜十時。お。降。定。ス。○  
十五。の。日。晴。る。○細雨。深。雨。終。尤。壞  
ビ。ト。ヤ。著。号。三。三。刻。長田佳  
之。成。也。送。也。杉山。不。遇。し

○命。頃。昨。年。い。々。集。地。は。い。い。雨。降  
之。厚。き。く。津。い。少。し。昨。年。い。尤。也。  
甚。し。の。杉山。池。と。各。心。之。傷。も。な。る  
て。く。約。集。ス。の。杉山。女。云。く。明。日。は。い  
の。信。に。出。立。る。也。か。内。中。い。人。で。り  
良。之。情。も。の。比。宗。細。尾。各。ハ。此  
五。女。あ。り。し。ぜ。い。の。イ。イ。ジ。リ。の。ペ。ニ。ス  
○ル。セ。イ。○第。二。番。メ。之。女。ハ。学。校。也。

十六日 大使佛河住移○此の深窓  
晝向點燭

十七 十六 十九 陰小雨

廿日 陰小雨

廿一日 陰のべシク至て十八ホニ清風  
此日 伊匠ブリスト至て我等と休り  
髪を切り浴スミ野々同  
廿二日のサシデノ一日午後天野本多

雨生来訪ふの陰の小雨の無事遊光

廿四日 晴の十字半ヨリデビス伴

度いを見物スの集議院の空杯ハンス

エペイのロンドン、ウイバセニデーの陰夜三

イウじヤムノナシヨナシギヤシノ右五ま

見物ス五字半以帰宅ス至杞面も

了この休業

廿五日のクリスマスデー 午後雨 半時半陰

クリスマス、<sup>tree</sup>ツツ云々を各宗に  
よして英子に凡俗にありしにエヤ  
し凡俗に英の五六年前に来た  
し内天ビス、し活し、<sup>の</sup>ターケイと  
喫ス、<sup>願</sup>美し

廿六日 休業 <sup>の</sup>レゲイ <sup>の</sup>レヨシ <sup>の</sup>レヨシ <sup>の</sup>レヨシ  
廿七日 晴、クリストにハリス、至日本  
丹、て路、三、<sup>の</sup>同伴ス、<sup>の</sup>佛國

でニムし、レゲイ <sup>の</sup>レヨシ <sup>の</sup>レヨシ <sup>の</sup>レヨシ  
い、三十、考、出、し、書、ば、<sup>の</sup>休業、

廿八日 晴、始業、

廿九日 雨、晴、

卅日

卅一日

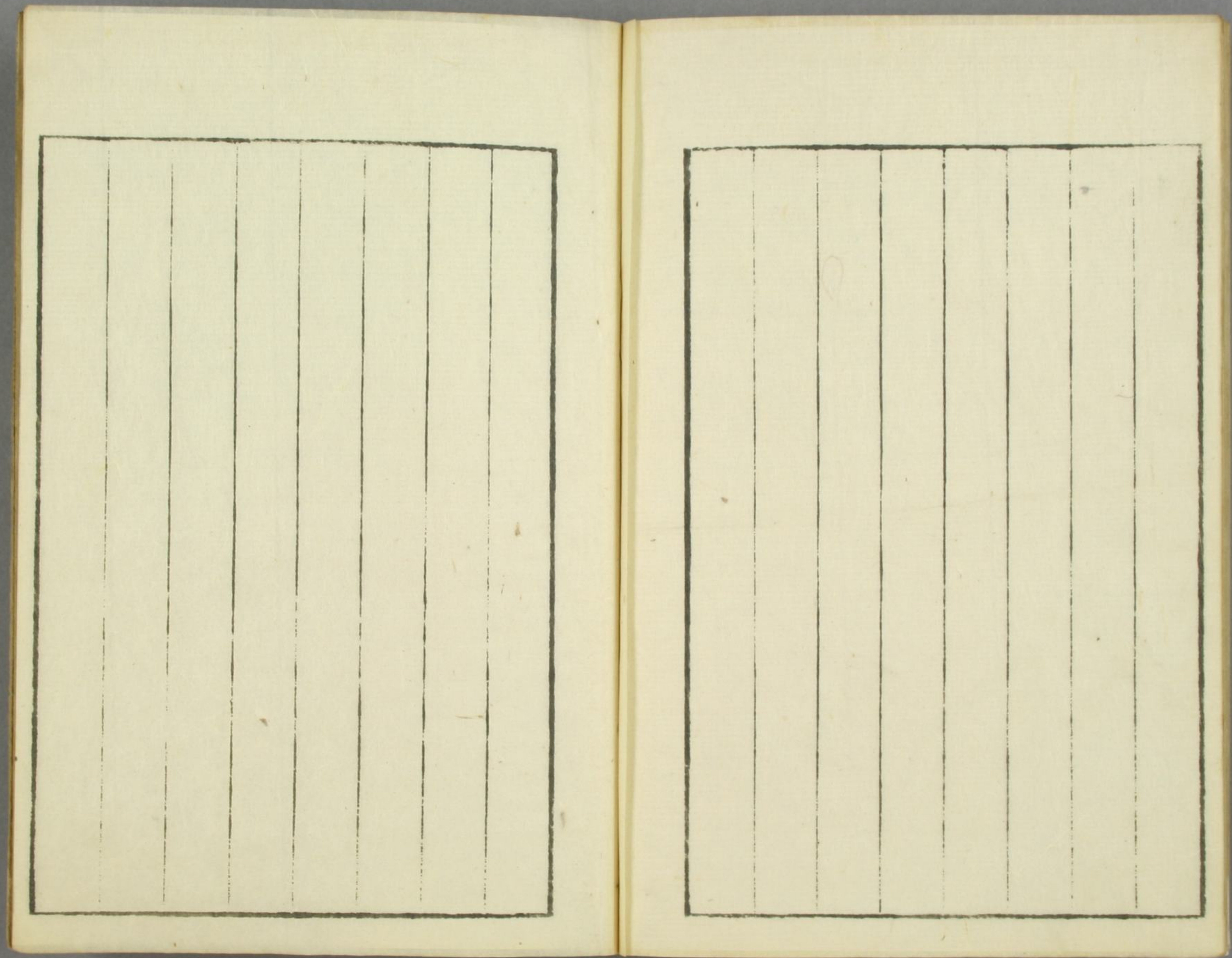
美子





曾谷友雲  
宮崎立元  
勝房州  
津田真首  
向山横村  
相原保次  
藤沼扶夫  
本林德世郎

大前新次  
中村敬太郎



日本之例に倣ひて三月の月夜に  
書生向年  
晩七年以て年之武陵桃源に人秦  
世之日月を不也も実の如くやある  
自笑ふる也

